ゴールドとドル

金とドルは複雑な男女関係のようでもある。ドルは金に支えられて生きてきたが、７１年に決別宣言をした。だが完全に別れたわけでもない。翌年復縁した。だが長続きせず、結局は次の年に別れた。ドルは金の世話にはならず独立して生きていくことにした。

だが完全に切れたわけでもなかった。ドルと金の距離は遠くなったり近くなったりして微妙な関係を築いてきた。その間復縁を求める声もあったが、具体的な手続きには至らなかった。ただ金の立場は最近徐々に強まってきたようだ。

金価格が上昇してきた。５月に続いて再び３年ほど前に付けた最高値を更新する可能性が出てきた。昨日は一時１オンス２０５０ドル（COMEX 先物）を超えた。

ドル金利の低下傾向が続くとの期待が引き金だった。金上昇の要因には他にドルの下落、戦争などの地政学的リスクの拡大、先行きの不確実性の増大などが挙げられる。

また需給要因もある。中央銀行の買いだ。今年前半は目立った。特に中国だ。中国は以前からドル一極体制の転換を公言してきた。特に米国がイランやロシアへの経済制裁の手段として基軸通貨のドルの地位を利用したことでドル一極体制のリスクを一層強めた。こうした懸念は中国だけではない。ロシアはもちろんだし、ポーランドやトルコの中央銀行も金のポートフォリオを著しく増加させた。

こうした要因や傾向がすぐに弱まるとは思えない。むしろしばらく続くと考える方が自然だろう。その点では金の最高値更新は時間の問題ともいえる。

ドル下落はドル金利低下と表裏一体となって進んでいるが、昨日はアルゼンチンペソ、トルコリラ、ロシアルーブルなど特殊な要因のある通貨以外は総じてドルに対して強含んだ。

中でもトレンドとしてみた場合、ドルメキシコペソは面白いのではないか。これまでメキシコペソはドルが全般的に強い局面でも比較的堅調に推移した。つ

まりドルペソは７月下旬まで下落傾向にあって１６台半ばまで下落した。その後、戻したが今月頃から再び下落している。以前のペソだったら戻し局面ではもっと上昇したと思うが、１８台の半ば水準で止まった。

ペソの堅調さの背景にあるのは金利水準が高いこと。政策金利は１１．２５％で据え置かれた。インフレ率は４％前半だ。インフレ率は低下傾向で来年２月ころには利下げの可能性があるが、それでも米国と比べると差が大きい。利下げ時にはペソが売られても戻る可能性が高い。

他にも米国移民からの送金やニアショアリングで外国からの直接投資も順調で、ペソへの需要は根強い。

市場に好意的でない大統領（ロペス・オブラドール大統領）の政治リスクは依然としてあるものの、来年は大統領選で彼は出馬しない。（任期６年で再選禁止のため。）

ドルペソは７月につけた１６台半ばを超える可能性がある。